

フレッシュマン・オカザキのインド通信

インドのお葬式&お墓事情

お世話になっております！

中国は旧正月も明け、ほとんどの工場が無事に通常の受注・生産が可能な状態になって参りました。ご協力頂き、有難う御座います。インドの方はというと、前回ご紹介したポンガルという祭日も1週間~10日間ほどで明け、工場にも職人が全員集合し生産に取り掛かっています。

さて、今回ご紹介するのはインドの葬儀、お墓事情です。一番身近なテーマであるにもかかわらず今まで書いていませんでしたね！インド人の大多数がヒन्दゥー教徒で、こういった方面にも独自の風習や掟が色濃く残っています。仏教の生まれた国でもあるので、日本との共通点はあるのか？テレビなどでご覧になった事のある方もいらっしゃるかと思いますが、本当に川に死体を流すのか？死生観は？とても気になるところです。

皆さまご存知**ガンジス川**。ヒन्दゥー教の人々にとっては「**聖なる川**」として崇められている**ガンガ**(現地語)ですが、ガンガで沐浴をすることには「罪を清める」という特別な意味があります。ヒन्दゥー教徒は基本的に人が亡くなると火葬してから、その遺骨をガンガに流します。聖なる川ガンガに流すことによって、罪も洗い流され、苦しい輪廻を繰り返すことなく、悟りの境地に達すると考えられているからです。ヒन्दゥー教の多くの人が死んだらガンガに葬られることを願っています。



では、人が亡くなってからガンガに葬られるまではどうなっているのでしょうか。まずは、居住地域ごとに定められた政府が管理している火葬場に行って遺体を火葬します。レンガで囲われた焼き場の中に、薪を積み上げた上に遺体を置いて、更にその上に薪を積み上げて火をつけます。そして4日後に骨を拾いに行きます。その時、まだ骨は熱くてさわれないほどなので、牛乳と水を混ぜたものをたっぷりかけて冷やします。遺骨を入れるための故人の名前と住所の入った専用の袋に、遺骨をおさめます。そのまま、火葬場に13日後まで安置します。13日後に骨を引き取り、斎場（昔は自宅で行うことが多かったですが最近では斎場でやる人が多いようです。）で、お坊さんをお呼びしてお葬式をします。お葬式自体は、日本で言う告別式とほとんど同じだそうです。お葬式が終わったら、そのまま車に乗り込みガンガに向かいます。ニューデリーの場合、ガンガまでは、だいたい200キロぐらい。その間、大変なのは、**その骨の入った袋をどこかに置いてはいけないということ**。必ず誰かが持っていなければならないのです。それは男性に限られますが、主に息子の役目です。息子がいない場合は、亡くなった人の男の兄弟、男の兄弟もいない場合は、一番近い親戚の男性が持ちます。ガンガで骨を葬る場所も決まっており、日本で言うならば「山田さんはココ」というように決まっており、その周辺に住む「山田さん」はみんなそこにやってくるのです。

そして、**流された遺骨は、砂糖が水に溶けるかのようにガンガの水と融合し、悟りの境地へと旅立つのです。**

以上がヒンドゥー教のある宗派の葬儀です。ヒンドゥー教は地域や身分により数多くの宗派があり、似たり寄ったりする部分がありますが宗派の数だけ葬儀の方法があると言っても過言ではありません。私たちがよく出張で訪れるインド南東部のチェンナイでは火葬後、各集落に一つはある埋葬場に埋めたり、川か海に流したりするのが一般的なようです。

また別の宗派では、日本のテレビでも取り上げられているように、火葬をせずにそのまま川に流す、「水葬」というものもインドでは行われ、火葬せずに土に埋める土葬もあるようです。

そしてお墓は、ヒンドゥー教には基本的にありません。一部カースト（身分制度）の低い人々の中には、お墓を建てる文化もあるようですが、輪廻転生の死生観からお墓はそぐわないようです。現世の自分の立場は、前世の行いによって決められ、現世での行いによって、来世で生まれ変わるものが決まる。すなわち、体は滅びても、魂は滅びることなく輪廻転生を繰り返し、また別の人間か生き物として生き返る、と考えられているのです。

しかし、インドの田舎の方を車で走っているとたまにお墓のようなものを見かけることがあります。これらはキリスト教徒やイスラム教徒のお墓である場合がほとんどです。田舎に住む貧しいインド人は、ヒンドゥー教最大の特徴であり、自分たちが虐げられる要因の一つでもあるカースト制度を嫌う傾向にあり、キリスト教やイスラム教に改宗する人も少なくないのです。

また、世界的に有名なあのタージマハールは実はお墓なのです。

タージマハールは、インドでイスラム教の最盛期であった西暦1632年頃、ムガル帝国5代皇帝のシャー・ジャハーンが、亡くなった王妃ムムターズ・マハールのために122年の歳月をかけて作った、世界遺産にもなっているインドを代表する建築物です。

やはりインドは非常に多様化した文化がある事がこのことからわかりますね。そして、日本の仏教ともかなり近い習慣がある事もわかります。

知れば知るほど奥深い、それがインドなんです！

丁場紹介 ～YKD～

安定の黒として広く定着している、YKDの丁場をご紹介します！
得意先様より原石の発注があり、前回の出張で原石検品に伺いました。場所としてはタミルナドゥ州という、クナムやインド工場オスヌメのTVMなどと同じ州に位置しているのですが、都市部チェンナイからは距離にして約300km、車でなんと8時間！！朝5時に出発しました…。高速道路もあるのですが、我々が向かうのは山の中なので、一般道はガタガタです。寝ようにも寝られない振動に耐えなければなりません…。そして車が止まり、着いたかと思えば、今度は山登り用の車に変えて更に20分ほど天地がひっくり返ったのではないかというほどの山道を進みます。お尻が何回宙に浮いたことか…。ようやく到着すると、そこには驚くほどきれいな景色が広がっています。その絶景がこちら！



↑下部堀口と上部堀口→

写真では遠くの方までは見えませんが、とても見晴らしがよかったです。下の方に見えるのが堀口の一つです。こちらには二つの堀口があり、山の下部と上部で掘っています。丁場全体は非常に広大で深度もある事から、長年採掘されている事がわかります。



→丁場事務室にタミンの社名

国営企業であるタミンにより運営されていることありますが、よく整備されており生産量も多く、大きな原石も多く生産されています。墓石だけでなく建築材としても幅広く使われており、日本、中国の他にもイタリアのバイヤーがキッチンカウンター用として買って行くようです。値段設定もサイズによって細かく分類されており、私たちはあまり購入の機会ありませんが、大きいものは2m x 1mやそれ以上の規格もあります。



私たちはいつも上部の堀口から購入しています。時期にもよりますが、下部の石からは原石を切ったあとに出てくる厄介な油シミがよく出るので避けます。しかし、それ以外の難点はこれといってなく、検品も非常にしやすい石と言えます。その理由は丁場職人の腕、これに尽きます。だいたい他の丁場では、例えばキスを見つけた際に丁場の職人とキスあるだろう！いや、これは深く入っていない！などと交渉(喧嘩?)をよくしているのですが、こちらの石は問題が少ないだけでなくしっかり採寸されているので、文句をつけようにもつけられません。色差も丁場との言い争いになりやすい問題なのですが、こちらでは色の薄い原石すら見当たりませんでした。本当に数少ない良い丁場ですので、オススメです！中国工場の加工賃の値上げなどで原石購入を考えられている方にとっては、歴史と実績があり安定しているので、始めやすい石種かと思います！

では、今月はこの辺で失礼致します。有難う御座いました！

2016/3/1 オカザキ